

北九州市の国際環境協力と経験（特集 地方自治体による国際環境協力）

著者	内藤 英夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	235
ページ	21-22
発行年	2015-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003229

北九州市の
国際環境協力と経験

内藤 英夫

●はじめに

本稿は、北九州市の国際環境協力について、友好都市の大連市での取り組みから昨今大きな問題となっている中国の大気環境改善事業までをまとめたものである。本市が都市間連携・協力によって、アジアの諸都市とどのような交流・協力、さらにはビジネスを展開してきたのか、筆者の体験を基に記述したもので、ご参考になればありがたい。なお、意見等は北九州市を代表するものではないことを申し添えておく。

●北九州市はどんな街

北九州市は九州の最も北にある街である。一九〇一年官営八幡製鐵所の操業から発展し、重化学工業を主体とした素材型産業（鉄鋼、化学、セメント・窯業、電力等）が特色になっている。素材型都市

であったことから一九五〇年代から一九八〇年代にかけて激甚な産業公害を体験した。その経験を活かして、一九八〇年代から国際環境協力、北九州エコタウンの建設、市民環境力の強化、さらには世界の環境首都を目指すなどの環境政策に取り組んできた。低炭素な街づくりを目指した「環境モデル都市」や新しい価値観の街づくりである「環境未来都市」に挑戦している。

●どのような環境国際協力に関わってきたか？

本市の環境国際協力は一九八一年一〇月、公害対策局（現環境局）職員三名を大連市に派遣し、「公害管理講座」を開催したことが始まりである。しばらく環境の交流は途切れたが、一九九三年、友好都市締結一五周年事業として、

大連市で「北九州―大連技術セミナー」を開催した。本市から産学官約五〇名の講師が参加し、我が国の優れた環境保全技術や生産性向上技術を紹介し、筆者も初めての海外出張と環境交流を経験した。

さらに、一九九二年、（公財）

北九州国際技術協力協会内に、KITA環境協力センター（以下、

「環境協力センター」を設立し、海外都市との環境協力事業に本格的に取り組み始めた。当時もっとも大規模な事業は、日本の自治体として初めてODAを活用した「大連市環境モデル地区整備計画」に関する開発調査（一九九六～二〇〇〇年度）である。調査から円借款事業にまでつながったが、市内企業が絡むまでには至らなかった。二一世紀に入ると、国際環境協力を取り巻く環境が大きく変わり、より具体的な成果を求め

られるようになった。地方は霞（国際的な評価）だけでは生きていけない。地域の活性化や発展、引いては経済的な効果を求められるようになり、「交流・協力からビジネスへ」を合言葉に新たな挑戦が開始された。しかし、当時、社会も企業も内需指向で、「環境」の切り口で海外事業へ乗り出す市内企業は少なく、環境協力センターと一緒に活動してくれる企業はそれほどなかったが、活動を通じて蓄積された経験は次の時代の礎になったと思っている。

●環境協力センターで印象深かったこと

筆者は二〇〇〇年四月に環境協力センターに赴任して以来、六年間いろいろな協力事業に携わってきた。一番印象に残っているのは、インドネシア・スラバヤ市で実施した生ごみのコンポスト化事業（いわゆるタカクラ式コンポスト）である。この事業は今日のインドネシア事業に大きな影響を与えたものと思っている。カウンターパート探しや資金繰り等で大変苦労したが、協力事業の成功事例と思っており、現在ではフィリピン・メトロセブにも広がり、花



堆肥化事業（提供：北九州市）

を咲かせている。

どの途上国のどの都市に行っても、担当者などから是非「日本の優れた環境技術や製品」を教えて欲しい等、枕詞として必ずいわれる。でも、最後の言葉は「高い」であった。確かに、初期費用は高いが、壊れにくく省エネでメンテナンス費用を含めトータルで考えると安いと説明しても、「無い袖は振れない」であった。日本の企業や、市内の企業の技術や製品がどうすれば売れるのかずっと悩み続けていた時代であった。

●環境ビジネス再挑戦と新たなうねり

二年間この分野から離れていたが、二〇〇八年四月再挑戦の機会が訪れた。日中政府間の覚書に基づき、中国の資源循環型都市づくりに協力するもので、中国の青島市や天津市と、廃家電や廃自動車等のリサイクルビジネスを担当した。この事業にかなりのめり込み、四年間携わり、日本や中国のリサイクル事業を勉強しながら、市内企業のビジネスチャンスをつかしたが、ここでも厚い壁にぶち当たってしまいうまくいかなかった。この経験は今の仕事に大きく役立っている。

本市が二〇〇八年七月、「環境モデル都市」に選定され、大きな変動期を迎えることになった。本市はアジア地域で二〇五〇年度までに一五〇%（二〇〇五年度市内排出量比）の温室効果ガスを削減することを目標に掲げ、その拠点として「アジア低炭素化センター（以下、「アジ低」）を、二〇一〇年六月に設立した。アジ低が環境ビジネスの最前線で様々な事業にチャレンジしている。

この四年半の間に、二〇名を超える市職員が七九件の調査等の事

業に従事し、また関わった企業は八一社（市内企業三九社）にのぼり、海外の一二カ国・四五都市で活動してきた。

●環境ビジネスに関わって感じたこと

環境ビジネスに関わって難しく思うのは企業との付き合い方である。企業側に近づきすぎても、また離れ過ぎてもうまくいかない、寄り添いつつもツキ離す絶妙なバランス感覚が必要である。また、お上意識を捨て企業の方々と同じ目線でしっかりとコミュニケーションがとれることも重要である。

長年廃棄物分野に関わってやっとならぶことは、日本のリサイクルシステムは素晴らしい、世界でも引けを取らないと思っている。しかし、そのシステムで使う機器は日本製に限る必要はないと思うようになった。むしろ日本製以外である方が経済的で持続可能な経営に繋がると思っている。これまで嫌っていた大陸育ちのドイツ製品も捨てたものではないと思うようになった。

海外に進出する企業はリスクを覚悟すべきである。また、資金的な支援を上手く繋げていくことも

大切である。しかし、二、三年真剣に取り組んで目が出ない時は諦めが肝心と思っている。自己資金はビター一文出さない、リスクを取らない企業、また意思決定が遅い企業は海外ビジネスをしない方がよいと思っている。

●おわりに

さて、筆者は現在、中国の大気環境改善協力を担当している。大気汚染、特に微小粒子状物質で成果を短期間で出すことはほとんど不可能と考えている。

相手都市の交流を進めながら、本市企業のビジネスにどのように繋げていくのか、また眠れない日々を過ごすことになるのではと思っている。

国際環境協力に関わって十数年が経ち私にとってはラストチャンスと考えており、本成功事例を作りたいと思っている。

私が関係したビジネスで成功した事例はなく、失敗の連続である。そういう筆者が書いたものとの前提で読んで頂ければ幸いである。

（ないとう ひでお／北九州市環境局環境国際担当部長）